
バカと新世界と召喚獣

真上 竜太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと新世界と召喚獣

【Nコード】

N8458Y

【作者名】

真上 竜太

【あらすじ】

地球とよばれる世界ともう一つの世界が交わり新たに生まれた世界。そうして生まれた新たな世界は【魔力や気】と呼ばれるものが溢れ【魔法と技】が一般化された世界。世界が変わり価値観も変った世界で天災と呼ばれた少年達が繰り広げるバトルラブコメここに開幕！

現在第一章更新中。下のはSSに載せた予告です。

第一章 宿命の里帰り編予告

宿命の故郷文月そこに帰り着いた明久、彼はそこでなにをなすの

か？

「傷付いた！その僕を判別した方法にエベレストより深く、マリアナ海溝より高く傷付いた！」

「前回あまり目立ってなかったオリヒロインズは？」

「主はやはりワシの敵じゃ！」

「明久様を満足させるおっぱいは私です！」

「大丈夫…おにい…ちゃん…はケダ…モノ…だから」

漸く登場する原作ヒロイン達。

「明久君を満足させるおっぱいは私です！」

「お兄様ってよんでもいいですか？答えは聞いてませんが！」

「アタシはノーマルよー！」

「さあ受け止めて！私達の想いを！」

邂逅する悪友達。

「俺は強くならなきゃいけないんだよ！大切な者を守る為に！」

「……………その命貰い受ける！」

「儂が女なら間違いなく主に惚れておったじゃろうな」

八年ぶりに再会する家族は明久に何を思うのか

「あらあらアキ君あの夜の事覚えていないのですか？」

「はじめしてあきおにいちゃん。あなたのいもつとです」

「……………血の繋がりになんて些細な問題よね」

そして出会う最強！

「さあ始めるか次世代最強！」

「いいえ、終わらせるんですよ貴方の最強を！」

原作までが遠い…

ブログ SSには色々な始まり方があるけど自称バトルラブコメでこの始

皆さんこんばんは。このSSはリハビリのつもりで書いて行きます。一話づつを短く書いて短いサイクルで投稿していこうと思います。ですのでよろしく願います。

では本編をどうぞ。

プロローグ SSには色々な始まり方があるけど自称バトルラブコメでこの始

「……やっちゃった……」

開幕早々危ない台詞を吐いたのはパツと見美少女に見える美少年だった。

小さな体躯に肩下まで伸された茶色い髪に同色の瞳、顔のパーツは整いどこかネジー一本足りなさそう所も彼の顔に優しさというアクセントを与えて居た。

「昨日打ち上げでロリババアにお酒を飲まされて、皆で僕の部屋に来て、それで……やばい全部覚えてる……」

呟きながら少年はベットの上で頭を抱えた。何故彼が少女では無く少年とわかったのかそれは彼の服装？にあつた、彼は上半身は裸で彼の細身の身体には似合わない筋肉が見えて居るからだ。そして……

「お………ちゃ………ん」

「ムニヤムニヤ……明久さまあ」

彼の脇から彼に抱き付いて黒い肌に長い黒髪の少女と白い肌に肩口位の長さの金髪の少女が幸せそうにに寝息をたてていた。何故か全裸で。

良く見ると馬鹿みたいな大きさのベットの脇に下着を含めた着衣が四人分散らかつていた。

「ていうか全部あのロリババアのせいだ……僕はまだ手を出す気なんてなか「誰がババアじゃ明久」でたなロリババア！」

少年、【明久】の台詞の途中で彼の頭に薄い胸板（勿論何も着けていない）を押し付けたのは少女、と言うよりは幼女だ。見た目は八歳前後と言った所だろうか？だがその顔に浮かんでいる笑顔は妖艶そのものだ。

「なあにが『手を出す気は』じゃ、いずれは抱く気満々じゃったくせに」

そう言つて悪戯っぽく笑うと、両手で明久の顔を挟んで後を向か

せると啄む様にキスをする。

「それは、そうだけど…まだ年齢が…」

「昨日も言ったがそんな物些細な事じゃ十になれば酒を飲み、女を抱く。古来よりそれが常識じゃろうが？」

「何年前のどこの国の常識だよ」

ハアっとため息を着きながらも見ただ目よりも遅い腕でくすんだ金髪で何故か狐耳を付けた彼女を抱上げて、前に持って来ると薄い胸板をまさぐる。

「んっ…なんじゃ昨日アレだけやっておいて朝から盛っておるのか？」

「誘って来たのはそっちでしょ。それに僕に女の良さを教えたのは

【九妖】じゃんか」

「まあそっじゃが。やるからには本気で逝くぞ？」

「字が違う気がするけど勿論僕も本気でいくよ？」

「望む所じゃ」

言いながら口付けをする為に顔を近付けた。

プロローグ2 世界の事は大事だが本当に大事なのは自分の世界であるbyエロ

さて唐突だがベットの所で少々変った運動を始めた二人について詳しく語ろうと思う。

先程名が出た通り少年の名を明久。少女の名を九妖と言う。苗字は二人共有するには有るが彼等にとってたいした意味は無い。人に名乗る時など皆無だし名前で事足りるからだ。

明久の歳は今年で十三、まだまだ成長途中だがその容姿と体格から将来を期待するには十二分だろう。今でも彼を慕う異性は多いが一応男女の関係にあるのは「まだ」片手の指以内だ。

少々若過ぎる気もするが彼の側には今も明久の腕の中で喜声をあげ、明久の「初めて」をすべて奪った少女九妖がおり、その辺の倫理観を綺麗に無視して育て上げた。

曰く「自分を好く女兒を喜ばせるの男の当然の義務」「女は好きな男に抱かれる時が一番幸せ」「男たるもの十になれば酒を飲み、女を抱く。それは古来よりの常識」「男と女が一对一等今の政権を握る馬鹿が決めた事、気にする必要は無い」等々ギリギリな台詞を言い聞かせ育てられた為、明久の倫理観は色々崩壊していて細かな疑問を持つにしても概ね先の言葉通りにその辺はゆるゆるである。

そしてその件の幼女九妖も見た目通りの幼女では無い。一言で言えば彼女は世界の化身である。

今から約二百年前元々地球とよばれて居た世界と、異なる世界が「重なった」何故そうなったかは未だに解っていない。

ただその瞬間から世界中の人々は魔力を使った技術即ち「魔法」と気を使った技術「技」を使えて当たり前前の物と認識したのだ。だがこの二つについてはまた別の機会に詳しく語ろうと思う。今は九妖の事だ。

彼女は世界が重なった時に生み落とされた世界の化身本人曰く「元々存在していたが、世界が重なった時最も進んだ文化を持ってい

た人としての形を取ったのが今のワシじゃ。見た目は完全に趣味じやがのう」らしい。つまりは彼女は世界そのものである意味世界一のお年よ…げふげふ！おねえさんである。

暫く変わりゆく世界を楽しんで居た彼女は一人の赤子に出会った、彼女にとつて人間等皆同じだと思っていたが彼は『違った』なにがとは言えないが圧倒的にほかとは『違って』いた。

気付けば頬を紅く染め、を膝を折り震えた声でこう宣言していた。「我世界の化身九妖は未来永劫そなたを愛し！側にいる事を誓う！」まだ生まれたばかりの赤子に永劫の愛を誓う。今思うと痛い事この上ないしその直後彼の姉と死闘を繰り広げたのも苦い思い出だ。だがそのおかげで彼女は女の喜びを知る事が出来たのだ後悔などある訳が無い。

その後彼等は常に側におり今では同僚兼恋人として今も愛を確かめあっている訳だが、今部屋にいるのは彼等だけでは無い。

「あ、明久さまあ！？」

「ん…おに…ん…な…で？」

寝起き早々激しい運動（比喩表現）を見せられ叫び声を上げる少女達を見据えながら彼女は今日最初の温もりを体内に感じ女の喜びに打ち震えた。

少女達が目を覚ましてから少しの時間がたった。九妖は胡座をかいている明久の膝を陣取り、胸板に頭を預けながら少女二人に視線を送る。即ち『羨ましいじゃろう。ん?』と、その瞬間だった。

ドン！ドン！

ズツガシヤア！

キンツ！

凄まじい轟音と銃声が二つ、続いて先の音より高い音が一つ。そして何喰わぬ顔の九妖と怒り、いや嫉妬爆発！という少女二人とその形相にガクブルの明久が必死に視線を逸らしていた。

「明久様から離れる雌ぎつね！」

声を張り上げるの金髪で色白の美少女。先程は閉じられていたスライブルーの瞳に嫉妬を、空間転移とよばれる魔法により手元に手繰り寄せた彼女の瞳と同じ空色の二丁拳銃に殺意を乗せ、銃口を彼女が居るくせに自分に手を出した明久：では無く九妖に突き付ける。その時包み隠す物が無いせいでプルンと震えた核弾頭（比喻表現）に明久が身を乗り出したのはしょうがない事だろう。

「ぶ……こ……す！」

静かに殺意と嫉妬の炎を燃やすのは黒い肌、黒い髪、おまけに黒い瞳の美少女だ。

彼女はスラツと背が高く他の二人に比べ手も足も長い。恐らく身長も明久より高いだろう。その長身でもって『100t』と書かれたハンマーを担ぐ全裸姿をガン見た明久に罪は無いだろう。

「やれやれ、そう吠える事でも無かるう、『アリス』も『シユラ』も何を今さら」

「今さらじゃありません！昨日私は明久様にあ、愛を注いで頂きました！これで貴女と対等です！」

「シユ…ラ…もた…とう！」

双銃を構え吠える白い美少女アリスとハンマーを片手で振り回す褐色の美少女シユラ、言い方は違えど自分達は対等だと語る。と言う事は…

「二人共昨日の事…」

明久は昨日の九妖にしこたま酒を飲まされ二人が居るベットに放り込まれ、そのまま『やつちやつた』のだが…

「しっかり覚えてます。と言うか発案は私です」

「ぜつ…た…わすれ…ない」 衝撃の事実をサラツと言われて頭を抱える明久、いやそれだけ彼女達は自分を想っていてくれるている思えば！

「明久様なら必ず私達を抱いて下さると思っていました」

「お…にちゃ…んは…けだ…もの…だから」

彼女達の評価に明久は心が根元から折れそうだった。「そうか僕はそんな評価なのか…」と虚ろな目で呟いている。

「計画に協力すれば正妻はワシに譲る。そう言う契約だったはずじゃが？」

そんな明久の頭をよしよし、と撫でながら九妖は二人に言葉を返す。明久の「え、それ初耳なんだけど」と言う言葉は綺麗に無視だ。

「それとこれとは話が別です！」

「シユ…ラ達も…くっ…つく」

そう言っつて引付こうと明久に三十cm迫った時

ガン！

「いたっ！」「い…たい」

良い音と共に何かにぶつかった二人。パツとみそこには何も無いが明らかにアリス達は何かにぶつかった。よく見れば先程の銃弾が中空で制止するように何かに食込んでいる。

「この！雌ぎつね結界とは卑怯です」

「ず…るい！」

そう見えない壁のような物それは結界とよばれる術だ。他者が入込めない空間を作り隔離したり、目の前に結界を形成し盾にしたり

できる応用性の高いが複雑な術式が必要な為扱いが難しい高難度の術式だ。

それを片手間にやる九妖の実力はおおしてしるべし。だが才能の無駄遣いなのは気のせいだろうか？

「ふん悔しければ破ってみるのじゃな。もつともまだまだ乳臭い小娘には無理じゃろうがな」

余裕と嫌味をたっぷり乗せて放たれた言葉の刺。それを受けた二人は…

「良いでしょう、そんなに言うなら結界毎吹き飛ばして上げます！」「ぶっ…ぶす！」

見事にブチぎれた。明久の「ちよっアリス！それだと僕も一緒に吹き飛ばんだけど！？」と言う言葉はやはり綺麗に無視だ。

「我放つは光の軌跡！魔を打ち払い聖を焼く破壊の軌跡！森羅万象砕く一閃！その身で受ける！」

「闇よ…集え！…集え！…集え！」
アリスの言葉共に銃口に眩いばかりの光が、シユラの言葉と共にハンマーに唯唯暗い闇が集う。

魔技とよばれる魔力と気を融合して放つ高等技だ。その威力は使う者が使えば街をも吹き飛ばせる一撃だ。

その高等技をただの嫉妬で解き放つ。こちらも正に才能の無駄遣いである。

「良かるう来い小娘共！」

「ちよっ二人共ここホテルだよ！？」

そんな明久の叫びはやっぱり綺麗に無視だ。彼女達の耳には何かフィルターでもかかっているんだろうか？

「輝け！シャインカスタロフ！【光の破滅】」

「墮ちろ！…ダーク…カラス…トロフ！【闇の破滅】」

『共鳴技【リンクアーツ】！カオスカスタロフ！【混沌なる破滅】』

言葉共に放たれた一撃は混ざり合い、解け合い、透明な力の塊に

なり明久と九妖毎結界を飲み込んだ。

結界は無色透明の波動に飲み込まれたがホテルの部屋には一切被害が無かった、何故なら…

「つたく。二人共ちよつとやり過ぎだよ」

その破壊のエネルギーはすべて明久の手の中に収まっていた。下手をしたらこのホテルどころか街を数個灰に出来る程のエネルギーが、だ。

彼は【カオスカタストロフ】が結界を破った瞬間そのエネルギーを圧縮し、その手の平に収束したのだ。

もし彼の事を知らない人間が見れば有り得ない、と目の前の光景を否定するか、頬を思い切り抓るだろう。それぐらい現実ばなれした光景だった。

「あ、えつと…ゴメンなさい」

「ごめ…ん…なさい」

明久に軽く睨まれ目に見えて落ち込む二人。冷静になった頭で考え、まわりに迷惑をかけたと理解しうなだれた。

「……………ふう。でも、まあ」

暫く間を置いてから明久を二人を片手づつで二人同時に抱き締めた。因みに九妖は未だに明久の膝の上な為明久の腕の中に美少女が三人おさまる形である。……もげれば良いのに。

「九妖の安い挑発に簡単にのる程僕に触りたいって思ってくれたのは、素直に嬉しいかな」

言葉を発する間に彼女達の頭に手をやり優しく撫でる。

そんな事をされた二人は「ふにゃあ」とか「ん…もつと」とか言いながら幸せそうに惚けている。

「ぬう、明久。二人だけずるいのじゃ。ワシも撫でてくれ」

「だまらっしゃい」

明久は九妖の可愛らしい願いを軽く切り捨ててこちらも軽く睨ん

だ。

「元はと言えば九妖が悪いんだから少しは反省する事」

「ぬっしかしじゃな…その…」

「その、なに？」

九妖は暫く言い淀み意を決して顔をあげると軽く涙目になりながら、告げた。

「ワシとて女じゃ幾ら仕掛けたのがワシとはいえ、その…好きな男に他の女が触れるのはあまり良い気はせぬのじゃ。許してたもう」

なら最初からしなければ良いのにも思うが、九妖は二人の気持ちがいいたい程理解出来た。目の前に居る男は人としても、男としてもこれ以上無い程魅力てきた。

そんな彼のすぐ近くにおいて惚れるなど言う方が無理な話だ。ましてや彼女達は彼に人生を救われて居るのだ。

だから女として、二人の友して協力しない訳にはいかなかったのだ。傲慢な態度から誤解されがちだが彼女は友人思いの優しい女性だった。勿論明久はそれをわかっている。だから彼女の言葉は明久の胸を貫き…

「っ！許すに決ってるじゃん！ちくしょー！」

思い切り三人纏めて抱き締めた。三人のそれぞれ違う女性特有の匂いと、柔らかい身体を堪能しながら悦に浸る。端から見れば変態そのものだが女性三人も目を蕩けさせ、もつと彼の身体に身体を寄せているからおあいこだろう。

「でも三人共本当に良いの？その、三人同時に…なんて」

少し苦い顔をして言う明久に対して満面の笑みを浮べた三人は頷いた。

「何を今更、明久の女になった時点で覚悟しておったわ」

「私には貴方以外なんて有り得ません。たとえ貴方に嫌われたとしても貴方の側にいます」

「おにい…ちゃ…だけ」

言ってさらにくつつく三人。その三人を力強く抱き締め明久は

「ありがとう皆！僕精一杯頑張るよ！」

などと倫理敵にどうよ？な言葉を叫ぶがそれを感じ無い様に育てた張本人はその腕の中で幸せそうに惚けているので彼女の『計画通り！』と言った所だろうか？

そして少し距離を離し口付けを交わそうとした。…が。
ガチャ

「おい明久さっきの魔力の急上昇はいつたいなん…」

空気を全く読まず部屋の扉を開けて入って来た銀髪の少年は、同僚三人がほぼ裸で抱き合って居る部屋の光景を見て硬直し…

パキン

オレンジ色の結界に閉じ込められた…

「ちよつ明久！話せばわかる。話せばあ！」

「……………遺言はそれだけ？」

先程三人でイチャついていたとは思えないやけに低い声色で呟き【カオスカタストロフ】のエネルギーを更に圧縮して指先に集中する。

「まて！これは事故だ！偶然だ！事件だ！」

「いや最後のは違うじゃろ」

と言っ九妖の突っ込みをバツクに明久は…

「……………消えちやえ」

「イヤー！」

全エネルギーを結界内に開放した。

プロローグ5 キャラが男二人だけの上にはほぼ説明オンリーとは…どうかと思

あの後銀髪の少年を『どうしようも無いゴミ』と書かれたゴミ箱に投入れ（ゲートとよばれる空間転移装置で近所のごみ処理場直通）もう昼御飯時なのでホテルの食堂で食事をとると言う事になり、先に服を着た明久は部屋の前で彼女達を待つて居た。

「……ふう」

明久は壁に背を預け缶コーヒー片手にハンディサイズの機械をいじっていた。

明久の格好はワイシャツにズボンと言うラフな格好だが非常に絵になっている。

「溜め息をつくると幸運が逃げる」確か日本の伝承だったと思いませんが？」

「幸せから出る溜め息はノーカンって僕は思ってるけど？」

そんな明久に声を掛ける少年がいる。開いてるかどうかわからない糸目に短くも長くも無い黒髪、歳の頃と体型は明久と変わらない少年だ。その顔には明久とよく似た笑顔がかんている。

彼は明久の向かいの壁（と言っても一流と呼ばれるホテルなので廊下が広くかなり距離がある）に背を預けると同じ様に缶コーヒーを口にした。

「昨夜はありがとう御座いました」

明久と同じワイシャツとズボンの少年は軽く頭を下げながら礼を述べた。

「昨夜って言う昨日のアレ？お礼を言われる事じゃ無いよ。あの技術が実用化されれば僕達【アーク】の仕事が楽になる事は解り切ってる。なら協力するのは当然でしょ」

「それでもアークの賛同を受けた事でこの業界では新参者の僕達【文月】の技術が注目をつけたのは確かですから」

彼等の会話を補足すると昨日は三週間に渡り続いた【最先端技術

考察会】つまり一流と呼ばれる組織のトップが集まりその技術をお披露目し、評価すると言う会議の最終日だったのだ。

その会議の最終日に行われた【総合魔機具製造会社文月】が行ったプレゼンテーションに対して最も速く、強い関心をよせたのが【全世界魔気事件対策機構】通称アークである。

二百年前の世界融合の際に出現した魔力と気、それが魔法と技を生み出した。

それにより人々の生活は少しずつであるが変わっていた

、先のゲートの技術もそうだが魔法と機械を融合し生み出された【魔機具】とよばれる技術、スポーツは技を使用した闘いやプレーが認められている。等々などゆっくりだが確実に世界は様変わりをしていた。

だがそれに伴いその力を悪用し私利私欲を満たす犯罪者が増えたのも当然の流れだろう。それに対抗する為に造られた機関が【全世界魔気事件対策機構 アーク】解りやすく言うと魔気犯罪、魔法や気を悪用した犯罪専門の国際警察である。

アークは誕生した時よりその役割によって世界に対して多大な影響力と、力を持っていた。だがアークを今の世界のトップに名を連ねる組織にしたのは他でもない…

「感謝してるならお昼御飯奢ってくれない？今からなんだよね」

現在のアークの若きトップである彼、吉井明久の力が大きい。いや彼の力あってこそと云って言い。彼は頭の回転こそ悪いが人を見る目は本物だった。

彼は正確に人の才能を見抜き、最もてきした場所と時に最も適した人材を配置した。たったそれだけ、だがそれだけでアークは世界は変わった。

僅か六年で世界の主だった犯罪組織は潰れ、アークとそれを束ねる少年吉井明久率いる【五芒星^{ペンタゴン}】が抑止力となり世界の魔気犯罪は減り続けている。

「ならこの前行った近郊の僕の別荘に来ませんか？勿論他の皆様も

「一緒に」

そして彼が最も信頼する魔機具メーカー【文月】を纏める若き才が彼『藤堂文斗』明久と同じ歳である彼も短い間に文月の一流企業の座を不動の物にし、今回新しく犯罪抑止に繋がる数々の技術を発表した、紛れも無い天才とよばれる者のひとりだ。

「いきなりだけど良いの？」

「勿論です。使用人達もペンタゴンが来るとなると喜んでくれる筈です。是非」

「分った。じゃあ彼女達が来たら行かせて貰うね。場所はマーキングしてるから問題ないし」

「わかりました。ではお待ちしています」

そう言っただけ彼は相変わらずの笑顔で去っていった。

プロローグ6 食後の運動は大事です。…運動してるの僕だけじゃないですか？

明久達四人（銀髪の少年？彼なら地中深くで虫の息です）は文斗の別荘で昼食を取った後女性陣は文斗の秘書の女性と買い物にでかけ、明久と文斗は食後の運動としてメイド数人と共に普通の高校の体育館程の広さが有る空間に居た。

「ルールはいつもどおりで良いですね？」

「うん、いつもどおり文斗は僕に一撃入れるか僕を一步でもここから動かされれば勝ち。僕は文斗を気絶させるかギブアップって言わせれば勝ちで良いよ」

約三メートルの距離を開けて二人は対峙していた。文斗は右手に太刀、左手に脇差しを持つ二刀流、対する明久は無手で腕を組んでいる。

別に明久は文斗を甘くみている訳では無い。これが彼のスタイルだからだ。

「では、行きます！」

「いつでも！」

文斗は一声かけると腕を交差し肉体に気を巡らせる。それにより肉体が活性化され身体能力が一時てきに跳ね上がる。これは気を使わない人間にとっては基礎中の基礎技の名前すらない技だ。

対して明久は何もしない。ただ腕を組み、文斗を見据える。…ただそれだけの筈だった。

「っ！？」

一瞬走った寒気に従い文斗は後ろに飛ぶ、その瞬間
ドッオオン！

轟音と共に今まで文斗が立っていた場所がまるで砲弾が着弾したように吹き飛ぶ！

「ノーモーションであの威力、相変わらず無茶苦茶です、ね！」

言葉尻と共に明久に肉薄し脇差しを振う文斗、そのスピードは尋

常では無い。だが…

キン！

甲高い音共に明久の四十cm手前で脇差しが止まる。だがそれが当然と言ふふうには日本刀を振う。

キン！

再び甲高い音と共に止まる日本刀。

音の正体は明久が常時展開している結界である。それと刀がぶつかり音がなり刀が止まる。

だがそれにめけず刀を振う。何度止められようと振う！振う！振う！

「【剣技竜巻！】」

次々剣が振るわれる度剣速が上がり。それが斬撃の暴風となり明久の周りが荒れ狂い、先程の轟音の様に地面抉って行く。だが…

「さて、つとそろそろ行こうかな」

明久は前髪すら靡かせていない、まるで暴風雨の中に有る目の中にある様に、笑顔すら浮べた明久はゆっくり腕組みを解き右手の指を弾く。

パチン

そんな音同時に一陣の風が起きる、それは文斗が起こした暴風を押し戻し文斗を宙へと舞いあげる。

「くっ！？」

直ぐに体制を立て直す文斗に。

トン

まるで靴の先を整える様に明久は爪先で地面を蹴り、それに合わせて地面から槍の様に突き出た土、いや岩が襲う。

「なめ、るな！」

直ぐさま空中を蹴り宙を走る。【虚空瞬動】大気をその脚で蹴り中空を走る技だ。

それに対して明久は

「バンッ！」

右手で銃の形を作り撃つ真似をする。それと同時に魔力の塊、魔弾が飛ぶ

ドツオオン！

それをギリギリでかわした文斗の背後で壁が弾け飛ぶ。しかも…

「なんて数!？」

一撃では無い。十や二十でもない、文斗の視界を埋め尽す破壊の嵐!

「舞い踊れ【マジック? ストーム】」

明久の言葉と共に文斗は破壊の光嵐に飲み込まれた。

吉井明久、彼は魔法と踊る。

ブローグ なんか所々見た事有る技が有るんだけどb yアーク？マジツナイト

文斗の家に新しく使えた若いメイドは愕然としていた。食後の運動と称して始まった自分が支える主とその友人だと言うペンタゴンだと名乗る少年の模擬戦。

最初は疑っていた。ペンタゴン、とりわけ吉井明久と言えば世界屈指の実力を誇り【世界に愛されし者】の称号を持つ【極？魔法剣士（アーク？マジツナイト）】この時代で最も有名な名前の一つだ。吉井明久はメディアに顔を出さない事で有名だった。その方が犯罪に対する抑止力になるからだと言っていた。なるほどと思う。もしかしたら隣人が、繋がりのある人間が、目の前の見知らぬ人物が世界屈指の実力者かもしれないと言う疑念は犯罪を犯そうとする者には強力な抑止力になる。

そんな彼がこんなに若い、いや幼い筈が無い、彼等なりの悪戯だろうと思っていた。しかし…

「…すごい」

今繰り広げられている光景は想像を逸脱していた。杖などの媒介も呪文の詠唱も無く魔法を使う、彼女が知る常識では有り得ない光景だった。

「さて三十秒、そろそろ限界かな？」

彼の言葉と共に主が飲み込まれた光嵐を見詰める。

確かにあの光嵐の中では幾ら彼女の主でも…

「【剣技天輪】！」

ズツバアアン！

文斗の言葉と共に光嵐は切り裂かれ中から文斗が現われる。彼は片膝をつき、肩で息をしている。が血は一滴も出ていない。

何故ならこの屋敷、いや全世界には生身の人間に直接魔法や技傷つけられ無い様特殊な魔機具が配置されているからだ。

もともと、魔機具の出力を越えた威力のものは普通に人間を傷つ

けるし、無機物の破壊は防げないが…それでもその魔機具【リリナノ】により魔気使いがスポーツなどで全力を振えるようになったりと、世界に与えた影響は間違なく魔機具No.1だ。

因みに名前には特に意味は無い。どこかの白い魔王が主人公のアニメ等は欠片も関係ない。

「やっぱりこんなもんか、もうちょい魔力増やせば良かったかな？」

「なにを、言うんです、貴方なら、いつでも、追撃、出来たでしょう？？」

「さあどうかな？」

息も絶え絶えな文斗に対して明久は首を傾げながらも笑顔を絶さない。彼は心底楽しそうに言葉を紡ぎ腕を振う、それだけで大気はうねり馬鹿げた程の魔力が彼の周りを覆っていく。

「さて、皆もそろそろ帰って来る頃だし…」

そう言つて無造作に右手を掲げる。そしてそこに吸い込まれるように集まる魔力。

「そろそろ終わりにしようか」

そしてそれは眩いばかりの光を放ち拳に宿る。

「【魔技法光拳】かつて魔技拳闘大会において世界を七度制した男が用い、その後誰一人習得出来なかったと言われる技法ですか」

「その通りって言いたい所だけど誰一人つて言うのは間違い、だって僕使えるし」

「貴方が特殊なんですよ」

言いながらも文斗の体からは冷汗が吹出し恐怖と言つたの本能から全身の震えは止まらない。だが

(相手にとって不足無し！)

彼は諦めていない。震える心と体を抑え勝利の為に足掻く！

「契約により我に従え！高殿の王！来れ巨神を滅ぼす燃ゆる立つ雷雲！百重千重重なりて」

刀を交差し魔法の為の詠唱を紡ぐ、明久はそれを特に何もせず見詰め考察する。

「この詠唱は確か、雷の最上位魔法の一つ【千の雷】？確かに強力だけど僕の障壁を貫く程じゃあ「走れよ稲妻！【千の雷】続いて【固定】そして【掌握】！」……………は？」

文斗は渦巻く雷光を抑え一つに纏め、手の平で握り潰しそのエネルギーは彼の身体を駆け巡る！

「【術式兵装雷天大壮】！」

「これは！？…術式兵装、しかも裏に属するタイプの…初めて見た術式兵装は魔法を自らの身体に宿し、身体能力を爆発てきに上げる技だ。だが強力な分反動が半端では無い。

「流石は明久さん、一見でそこまで見抜くとはなら次の僕の攻撃もわかっているのでしょう？」

冷汗を流しながら言葉を紡ぐ文斗。その身体に纏う光は淡くしかし力強い。

「うん、一撃必殺だね。良いよ全力で迎え撃つ！」

「それでこそ明久さんです！では行きます！」

二刀を構え明久に切りかかる文斗。正にそのスピードは雷速！故にその歩法は「【雷速瞬動】！」

明久は動かないただ静かに拳を引く。

「【秘剣？一瞬万撃？式刀雷刀五月雨斬り】！」

放たれる斬撃は一撃にして万撃。正に斬撃の瀑布！先程の明久の光嵐を上回る斬撃！

その攻撃を受けて明久の障壁が破られて行く。今まで一筋も傷つかなかつた障壁が、だ。

「これで終わりです！」

その自体を前に明久は冷静だった。冷静に引いていた右腕を、突き出した。

「【ビツクバン？ペガサス流星拳】！」

ギョガッ！

形容しがたい音と共にすべての斬撃は消し飛び文斗はあらゆる角

度と方向から拳撃を受けた。

「がっはっ！」

何故文斗の万を越える斬撃をかき消され拳撃を受けたのか、答えは簡単だ。明久はそれを越える速度で拳を放った。ただそれだけだ。「確かに雷速は一瞬で空をかける。だけど天馬は一瞬で宇宙そらをかけるんだ。文斗」

途方もない蓮撃をうけた文斗はその言葉を最後まで聞かずに意識を手放した。

プロローグ 8 運命って出会った人数だけあると思うby純粹野郎

「本当にゴメン。文斗が思ったより強くなってたからついやり過ぎちゃった」

「良いんですよ。僕が望んだ事でもありますから」

(ズザザ！)

意識が復活した文斗の治療をおえ(明久が治療魔法で一瞬で全快にした)女性陣を交えティータイムを始めた途端交されたのが上の会話である。

「あの、何故皆さん明久さんを掴んで全力で下がるのですか？」

「だ、だって貴方明久様に気絶させられるのを望んだって」

「…それは…なし」

「文斗よ流石のワシもそれにはドン引きするしかないのじゃが」

どうやら女性陣は文斗の発言を聞いて彼を特殊趣味の人間と判断したらしく、一気に女性陣から言葉の集中砲火を浴びる文斗。まあ彼の発言はそう取られてもなんら違和感無い台詞だったので女性陣の反応も仕方ないと言えば仕方無い。

「ち、違いますよ！今のは言葉のあやで気絶した事に文句が無いだけで、嬉しい訳じゃ無いですよ！」

「そうだよ皆、世の中に気絶させられて喜ぶ人なんて居る訳ないじゃない」

後光がささんばかりの明久の笑顔。本気でさっきの台詞を言ったと嫌でも理解させられる、晴れ晴れとした笑顔だ。

「そ、そうですね。世の中にそんな人いる訳ないですよね」

「うむ、明久の言うとおりじゃ」

「シユラ…達の…かん…ちがい」

明久の笑顔にやられ簡単に意見を翻す三人。あまりの扱いの差に文斗がそっと涙を流したのは仕方ない事だろう。

「そう言えば近々里帰りなさるそうですね」

「うん。今回の会議のまとめが終わったら一回日本に帰るつもり。ここ何年もまともに帰って無いし、やっとゆっくり出来そうだからね」
「無論ワシらも共に行くつもりじゃ」

その言葉を聞き文斗は少し考えるそぶりをすると口を開いた。

「明久さんに僕が言った例の件覚えておいでですか？」

「例の件って言うと、魔力以外の力を使った使役獣を召喚するシステムの事？」

「はい、その件です」

使役獣、別の言い方をすれば召喚獣。召喚した者に対価を求める変りに召喚者をサポートする異世界に住むと言われる者達だ。その力は凄まじく強力な召喚獣は一軍に相当すると言われる。

ただ彼等を使役する為には膨大な魔力と精神力が必要な為あまり一般的な技術ではない。

彼は、いや彼等文月はそれを魔機具技術で再現する研究を続けて来た。

「あれは確か日本で試作品を運転するって事でしたよね？ウチのメンバーの養成機関でも導入する予定ですし、文月でも新しく学魔両道を目指した機関を設立してそこで試すとか」

それが実現すれば現場での戦闘がグツと楽になると判断し協力をして来たのが明久でありアークだ。

文月とアーク、世界指折りの魔機具技術と、犯罪を止める為に選ばれた魔気戦闘のエリート達の戦闘データ、それらの統合により低魔力で召喚獣を召喚可能にするシステムの開発に成功したのだ。もつともまだまだ試作段階も良い所だが。

「はい。その機関ですが日本で高校と呼ばれる形で実現する為に話が進んでいます。」

「……高校か……」

その言葉に何か思う所があるのか明久は小さく呟くと胸元に手を置いた。

「どうかしましたか？」

「別に…何でも無いよ」

そう言って淡く笑う明久。その笑顔は儂く、今にも泣き出しそうな笑顔だ。

その笑顔を見て顔を歪める九妖達と何かを察した文斗。

「そうですか、そこで明久さん達にお願いがあるんです？」

「お願い？なにさ改まって」

文斗の言葉に首をひねる明久。彼等の付き合いは短いが多少の事を改まって言われる程浅い付き合いでは無い。

「実は…明久さん達にその生徒になつて頂きたいのです」

「……………え？」

文斗のこの願いが明久の運命を変える事に繋がる事を明久達はまだ知らない。

突然の文斗の申し出に反応出来ずにポカーンとしている四人を前に（この人達がこんな顔する所なんて、よっぽど予想外だったんでしようね）と内心呟くと少し苦笑して言葉を紡いだ。

「高校に入る、と言っても勿論今すぐではありません。今から三、四年後、僕達が普通に生活していれば高校に在学する年齢になった時の話です」

「ちよ…ちよつと待って、学校？僕達が？」

「はい。勿論この話は貴方達アークの母体である世界平定機関の方々にも了承を頂いています」

「お婆ちゃん達に？」

「あの方達が明久さん達に普通の子供らしい生活をおくらせたいと言っているのはご存じですね？」

「うん。何回か言われた事あるし」

【世界平定機関】現役を引退したアークの先人達が所属し、前線で事件を解決するアークをバックでサポートする機関である。

明久は若干六歳にして彼等に才能を見出され招待を受け、以後アークの本部で教育と訓練に明け暮れ、僅か八歳で前線へ出た。

その才能と努力の結果僅か六年で世界に名を轟かせた彼だが、まともに学校等に通った事が無い。

他のメンバーも似た様な物だ、彼女達は明久に出会うまで孤独に生き、出会ってから明久にベッタリだ。その為お世辞にも普通の生活をした事が有るとは言いがたい。

世界平定機関の先人達は幾ら自分達が見出したとはいえ、いや見出したからこそ短い間でも良いから彼等に普通の子供としての生活をおくらせてやりたい、そう常々思ってた。

そんな時に文月から先の要請があり即時受諾。本人達が望むなら是非高校に通わせてやって欲しいと、逆に頼みこんだぐらいた。

「いかがでしょうか？勿論その時は僕も一緒に通わせて頂きますが」
明久が文斗の言葉にもう一度胸に手を当ると口をひら…

「受けるに決まっておろう」

「無論受けます」

「受け…る」

こうしたら三人の彼女に台詞を遮られた。

「ちょ…皆！？」

「黙るのじゃ明久」

「明久様は黙って下さい」

「おにい…ちゃ…はかん…けい…ない」

「アレ！？僕当事者なのに蚊帳の外だ！？文斗、君もなんとか…」

「では参加で話を進めさせて頂きますね」

「まさかの文斗も華麗にスルーだ！？」

さっきまでの少しシリアスだった雰囲気をぶち壊して展開される無視と言う明久への軽い苛め、そのせいで彼は多少涙目だ。

「どうせ主の事じゃワシ等が抜けたら前線に支障が出て迷惑が他の皆にかかる、だから断ろう。とか考えておるのじゃろ？」

九妖の指摘に驚いた顔をする明久、彼女の言葉は多少の違いはあるが概ね明久が言おうとした台詞そのままだった。

「やはりこの主の優しさは美点じゃが自分をないがしろにするのは欠点じゃな」

「そうです！明久様はもつと御自分を大切になさるべきです！他の人ばかりでは無く自分を中心とした意見もたまには言うべきです！」

「シユラ…達は…おにい…ちゃ…の味方…だから」

「彼女達の言う通りです。僕は吉井明久では無く明久さん個人の意見を知りたいのです」

瞬く間に展開される明久を非難すると同時に擁護する会話。彼女達は明久の性格を熟知していた。彼が他のアークのメンバー達を気遣い自分の心を押し殺そうとするのを、それは優しさと言う美点か

も知れない、だが彼を大切に思う彼女達はもつと自分を大切にしたいのだ。

「僕の、気持ち？」

「はい。アークのペンタゴンでは無く一人の人間としての意見を聞きたいんです」

言われ彼は考える。自分の気持ち…実際彼はそう言った物を深く考えた事はあまり無かった。いや考える事を許されなかったと言う方が正しい。

『非凡な才能』彼は生れながら魔気に関してそう言われても仕方がない才能を持って居た。確かに聞こえの良い言葉だ。だが彼は幼い頃よりこの言葉に縛られて生きて来た。

彼は生れながら世界に愛されている。知れば誰もが望むだろう。彼のようになりたいと。彼のようになりたいと。だがそれは彼の一片に過ぎない。

『才有る者の責任』彼が自覚しているかどうかは疑問だが世界は彼に常にそれを要求して来た。

子供時代ひたすらその力を磨き、それからはその力を用い世界を救い続けて来た。

命を、時間を、自分自身を犠牲にして…だがそれと同時に世界は彼に救いも与えて居た。

無茶をする彼を支える彼女達、共に戦場を駆ける戦友、自分と同じく才を持つ親友。普通の生活では決して手に入らなかった者達。

それを手に入れておきながらまだ普通の生活に未練があるのか？
まだあの世界を望むのか？

様々な考えが彼の頭を過ぎる、その中で浮かんだ一つ的情景。

『絶対に同じ高校に行こうね！約束だよ！』

『うん、約束するよ！』

『はい、約束です！』

それは幼い頃の彼の記憶。彼がまだ自分の才を知る前の、彼の一番始めの根源たる記憶。

「そうだ、僕は…僕にもやりたい事がある」

明久は再び胸を掴むと静かに続きを紡いだ。

「僕は高校に行きたい、ううん行かないといけない。だからお願い文斗、僕を文月の高校に入れて欲しい」

その言葉を聞いて他の皆は静かに微笑んだ。

プロローグ？ザ？ラスト 始まりの終わりって小さい時よく意味がわからなかつ

「そう言えばなんで僕達の里帰りの話からこの話になったの？」

あれから少したつて明久は通常通りのほほんとした笑顔と雰囲気を取り戻して会話を再開した。何故か九妖を膝の上に乗せて髪を弄って居るが。

幸せそうな九妖と「何故私はグーを？」「グー…嫌い」とか言いながら机に突つ伏すアリスとシユラが印象てきた。

「実は今回の高校を明久さんと僕の故郷、そして我が社の本社がある文月の地に建てる為に建設が続いています」

「なるほど、だから今回の帰郷に乗じて見て来いって事か」

「その通りです。今回は建てる予定の高校は特別な物にするつもりですし、一度実際見て貰おうと思ひまして。それに」

「それに？」

文斗の言葉を聞きながらコーヒーに口をつける明久。因みに彼はブラック派である。

「このタイミングなら現地の彼女達に良い報告が出来るでしょう？」

ブツハ！ 明久がコーヒーを吐き出す音

ニヤー！？ コーヒーを直撃された九妖の叫び

イイナー なにが良いのか深く考えたくない二人の呟き

笑顔で投下された文斗の爆撃によりお茶会は軽い混乱状態になる。

「ゲツホ、ゲツホ！文斗、なんでそれを？」

「なんで、ですか？明久さんともあるう方が愚問ですね。僕は文月のトップに名を連ねる人間ですよ。諜報は企業の基本ではないですか」

「こんな所で發揮しないでよ…ていうかどうやって調べたのか凄い気になるんだけど。というかあれはまだ子供の時の話で！」

「でも彼女達を大切に思っているのは本当でしょう？」

糸目のまま微笑む文斗に対して軽く頭を抱え「それはそうだけど」と呟く明久。その間にも『清めの炎』という魔法で九妖の服、因みに何故か巫女服を新品同様に清めて居る。

「まあそれは置いておいて、少しこれを見て貰って良いですか？」

といつて取り出したのは重要とだけ書かれた紙が一番上にある紙の束。明久は何も言わずに指をパチツ鳴らすと彼の顔に眼鏡がかかりそれを通して凄まじい速さで紙の束を読み始める。この眼鏡は早読みの眼鏡、簡単に言えば高速で読書が出来る魔機具である。

「……これって、教員のリスト？」

その紙の束には様々な年齢、性別、人種の顔写真とデータが記載されていた。共通点と言えば誰も彼もなんらかの分野で一流と呼ばれる事位だ。中には現役のアークやOBも含まれている。

「流石明久さんその通りです。僕達が作るうとしていいる学校は魔気学についても学問についても一流を目指す為の学校。当然それを教えるのも一流である必要があります」

文斗は話終えるとコーヒーを一口飲んだ。

因みに女性達は明久に引付いて興味無しとばかりに話を聞き流している。

「でも、足りないね」

明久は暫くリストをめくるとそう呟いた。

「福原慎、高橋洋子、寺井伸介、e t c . 確かに一流の人達だ。だけれど必ずいなければいけない人が足りないよね」

必ずいなければいけない者、それは過去に七度魔技拳闘大会を制し、鉄人と呼ばれる男だ。

「これを今見せるって事は……」

「はい。彼の説得と言うか彼からの条件を貴方に果たして頂きたいのです」

「条件？」

「彼が出した条件は一つ。自分を越える可能性のある闘士を学校に迎える事。勿論彼に認めさせた上です。」

その言葉を聞いて苦笑いを浮べる明久。

「また難題を。彼に認めさせるって彼と闘えって事でしょ？」

彼と闘い認めさせる、そんな事が出来るのは世界に何人いるか解らない。彼らの年代となれば五人いるか怪しい所だ。彼に白羽の矢が立つのも当然と言えた。

「確かに難題かもしれませんが貴方なら無理では無い筈です。受けて頂けますか？」

明久は暫く考えると息を吐き出した。「…良いよ」っと短く言う
と文斗の顔が綻んだ。

「やれやれ、久々の帰省ぐらい穏やかな物にしたかったのにな」

「それは無理じゃな」

「無理ですね」

「…無理」

苦笑しながら言った言葉に即反応する女性達もつとも彼の願いは
全否定だが。

「という訳で波乱の里帰りになりそうだけど、来る？」

「当然じゃ主を一人にすると何人女を引っ掛けるかわからんでな」

「明久様の女性関係は把握して無いと後々大変ですから」

「…一杯…増え…ると…困る」

「グウ、否定出来ない」

明久が苦い顔を作ってから顔を伏せた。

暫くすると誰からとも無く笑い出しやがて五人共が笑い出した。

それから暫く文斗の別荘には幼い少年達の笑い声が響き渡った。

かくして始まりは終わりを告げ舞台は一時運命の地文月へと移る。

その地で宿命の再会と出会いが待っている事をまだ誰も気付いて
いなかった。

プロローグの後書きと次章の予告

プロローグの後書き

皆さんこんばんにちは。

一応プロローグ編終了と言う事でプロローグ編全体の後書きをやるうと思えます。

まず始めにこんな妙な設定のSSを読んで下さる皆さんに最大級の感謝を。

さてこのプロローグ編は原作キャラは明久オンリーで他はオリキヤラという構成は最初から決めてました。おそらく読者様はなんだこれ?と思った事でしょうが、後悔はしておりません

プロローグ編と言う事で舞台やキャラの説明中心になってしまつてあまりヒロイン達を目立たせれ無かつた事を反省。というか予想以上に文斗が目立ってしまった:次章からは明久とヒロイン達を目立たせるよう頑張ります。

さて次章からは舞台は原作の舞台でもある文月に移っていきます。原作とは違う出会いと再会、それが明久達にもたらす物とは?そしてまだ出ぬ原作キャラに訪れる分岐点とは?その辺を中心に書いていきますのでどうぞよろしく願います。

では下に少し次章の予告を載せますので良かったらどうぞ。

第一章 宿命の里帰り編予告

宿命の故郷文月そこに帰り着いた明久、彼はそこでなにをなすのか?

「傷付いた!その僕を判別した方法にエベレストより深く、マリアナ海溝より高く傷付いた!」

前回あまり目立てなかつたオリヒロインズは?

「主はやはりワシの敵じゃ!」

「明久様を満足させるおっぱいは私です!」

「大丈夫:おにい:ちゃん:はケダ:モノ:だから」

漸く登場する原作ヒロイン達。

「明久君を満足させるおっぱいは私です！」

「お兄様ってよんでもいいですか？答えは聞いてませんが！」

「アタシはノーマルよー！」

「さあ受け止めて！私達の想いを！」

邂逅する悪友達。

「俺は強くならなきゃいけないんだよ！大切な者を守る為に！」

「……………その命貰い受ける！」

「儂が女なら間違いなく主に惚れておったじゃろうな」

八年ぶりに再会する家族は明久に何を思うのか

「あらあらアキ君あの夜の事覚えていないのですか？」

「はじめしてあきおにいちゃん。あなたのいもうとです」

「……………血の繋がりになんて些細な問題よね」

そして出会う最強！

「さあ始めるか次世代最強！」

「いいえ、終わらせるんですよ貴方の最強を！」

次章第一章宿命の故郷編

次章もよろしくお願ひします。

第一話 幼い頃の記憶って意外と忘れない物よねb y茶髪の少女

『ねえ知ってる？愛し合う二人が同じ高校に行くと幸せになれるんだって』

『それ違うアニメエ！』

『？どうしたんですか　くん』

『いや、なんかいわないといけない気がして…』

『ねえそれより　くんアタシと一緒に高校にいこっ！』

『ず、ずるいです　くんはわたしと高校にいくんです…！』

『アタシよ…！』

『わたしです…！』

『じゃあみんなで行こうよ』

『え？』

『だって同じ高校に行くと幸せになれるんでしょ？だったらみんなで行こうよ』

『それは、そうですね』

『でもぜんていが…』

『ダメ、なの？』

『ダメじゃない(わ)(です)！』

『よかったじゃあやくそく。みんなで同じ高校に行こうね』

『はい！』 『うん…！』

『約束だよ！』 『』

第一章 宿命の故郷編開幕

「また、懐かしい夢を見たものね」

朝の日差しの少女は眠りの中から目を覚ました。

肩口で切り揃えられた茶色の髪につり目ではあるもののキツい印象は無いエメラルドの澄んだ瞳、一言で言えば勝ち気そうなお美少女だ。

「ホント、もう八年も前の約束。もう彼が覚えてるかも解らないの

に、アタシって自分が思ってる以上に女々しいのかな？」

自傷気味に笑うと彼女は枕元にある携帯に手を伸す。そこに表示された時間は、休日と言う事で遊ぶ約束をした親友達との待ち合わせにはまだ時間があつた。

その携帯には二つのキーホルダーが掛かっていた。一つは兎、彼女の親友の一人を象徴するような純白な兎。そしてもう一つは鷲、力強く何者にも縛られない、彼を思わせる鷲。

「ホント貴方は今どこで何をしてるのかしらね」

彼とは別れてから八年会えて居ない。当時は携帯も無かつたし彼の行き先は外部と簡単に連絡が取れる場所では無かつた。

「まあ貴方の事だから元気にしてるんでしようけど…」

言つて鷲のキーホルダーをそつと持つ彼女。

「アタシ以外の女が近くに居ると思つと腹立つわね」

瞬間彼女から何やら黒いオーラが溢れる。鷲のキーホルダーが激しく震えているのは気のせいだと思いたい。

因みに彼女中で彼の回りに女が居ない確率等はゼロだ。彼の周りには昔から人が集まつていた。特に女子は四六時中と言つて言い程隣に一人はいた。

「まあ、良いわ暫くぶりに夢に出て来てくれたから許してあげる」

他人が聞いたら『え、何を？』な台詞だが残念な事にそれを言う人間はここには居ない。

暫く柔らかく微笑むと彼女は「うん、今日はなんだか良い事ありそう」と呟くと今日約束をしている親友に電話をかけた。

その日は彼が文月に里帰りを果たした次の日である。

第二話 昔からピンチを助けて恋に落ちるって定番よねb y仲良し二人組の少女

「ねえなんか今日『美晴』変じゃない？」

茶髪の美少女『木下優子』が待ち合わせ場所の喫茶店【ラ？ペテイス】に到着した早々口にした言葉がそれだった。

「あ、私もそれは思っていました」

優子の言葉に真っ先に反応したのは彼女の親友であり幼馴染みの『姫路瑞希』淡い桃色の髪、その髪には兎の髪留めが付いている。

そして紫の瞳に雪の様な白い肌、そしてアリスと同じくその年にしては立派な核弾頭（比喻表現）が眩しい美少女だ。

二人の視線の先にいるのはこの店の一人娘であり彼女達の親友の『清水美晴』だ。彼女はオレンジの髪を特徴的なドリルヘアに纏め同色の瞳をせわしなく動かし家の手伝いで接客をしている。いるのだが…

「美晴が男の人に笑顔で接客って、なんの冗談？」

美晴は男嫌い、と言うか男性拒絶性だ。男を堂々と豚と呼び話しかけるのも拒絶し、見るのも嫌だと常々言ってはばからない。

そんな彼女が手伝いとはいえ笑顔で男性客と接客している。優子達から見れば異様な光景だった。

「ああ、あれね」

「あれにはちよつと事情があつてね」

続け様に話すのは優子達の対面に座る薄紫色の髪と瞳をで瑞希と同じダイナマイト（比喻表現）を持つ岩下律子と、ショートカットの黒髪と黒目のボーイッシュな少女菊入真由美だ。

因みに二人とも間違なく美少女である。

「事情？」

首を傾げる優子に真由美と律子は少し考えると口を開いた。

「実は昨日私達と美晴は、えっと…襲われたと言つか…」

「襲われかけたと言つか…」

「襲われた!?!」

始めて聞く話に目を向く優子と瑞希。それはそうだろう親友が襲われたとなれば慌てるなど言う方が無理な話だ。

「ちょ…聞いてないわよ!大丈夫だったの!?!」

「お、落着いて優子大丈夫よ。なにもなかったから」

食ってかかる勢いの優子にどうどうと言いたげに手を上下させる律子。

「そう言えば襲われかけた。って言ってましたね」

「うん。実はその時に助けてくれた人がいるの」

慌てる優子を尻目に瑞希は真由美に詳しく話を聞いていた。

彼女曰く昨日塾の帰りに三人で人気の無い公園を通った所ナンパ、と言うには少々強引に迫られ、男性拒絶性である美晴がブチ切れありたっけの罵詈雑言を言っただけらしい。

「それはまた…」

「美晴ちゃんらしいですね」

「でしょ?でね相手も頭来ちゃったらしくて、ライセンスまで持ち出したの」

【ライセンス】とは簡単に言えば公共の場で魔法等の能力を使う為の物だ。

特定の間では必要無いが、基本的に公共の場で魔法等を使うには生まれた時に体内に施された枷を外す必要がある。その枷を外せるのがライセンスだ。

ライセンス無しで能力を使う事はほぼ不可能で無理矢理使えば脳が焼き切れるとまで言われている。更にライセンスは厳重に使用状況を管理され使用すれば直ぐにアークに知らされ、その使った状況を徹底的に調べられる。更にライセンスは使えば自動消滅する為再発行には厳重な検査と膨大な書類を書く必要がある。

このライセンス制度は犯罪を取締る意味といざと言う時魔法等を使って切り抜ける為、の二重の意味がある。

「ライセンスってまた大袈裟ね」

「でしょ？まあ例に漏れずCランクだったんだけど…」

Cランクとは？ライセンスの階級の事だ。ライセンスにはランクがありそれによって制限が細かく別れている。

C、Bランクは一般の学生や社会人が持つライセンスで基本的差は社会人が学生かの差しかない。勿論学生がCランクだ。

Aランク以上となると日常的に魔法等を使う専門的職種の間しか持っていない。

「けどライセンス持ち出されたらそう簡単に逃げられないでしょ？だから私達もライセンス使おうとしたんだけど」

「情けない事に震えて何も出来なかったのよね」

そう言っただけで苦い顔をする二人。だがそれも当然だろう、なんせ相手は男の上数人いたのだ。オマケにライセンスの使用方法は知っていても使う機会など殆ど無い。恐怖に震えても仕方無い事だろう。

「それでももうダメだっと思った時にね」

「美晴達と同じ位の男の子が助けてくれたんです！」

会話に入って来たのは美晴だった。どうやら手伝いは終わったらしく私服に着替えている。

「お、おはよう美晴」

「おはよう御座います美晴ちゃん」

「おはよう御座います！でその男の子はライセンスを使った相手にライセンスも使わずに挑みあつと言う間に叩きのめしてですね…」

それから三十分彼女はその少年について語り続けた。彼女にとつてそれ程強烈な出会いだっただろう。それを語る彼女も相槌を打つ真由美達もどうみても恋する少女だった。

第三話 人間の感情ってのは本当に難しいもんだなb y紅い髪の少年

裏路地に一人の少年がいた。紅いライオンのたてがみのような髪、一目で鍛えられているとわかる体躯。顔は野性味に溢れ、風貌と合せて野性児そのままと言った風体だ。

「チツ、朝っぱらからイライラしやがる」

少年はそう吐き捨てビルの壁に拳を叩きつけた。その拳にそってビルの壁がクモの巣のようにヒビが入る。

「くそ、なんなんだ昨日のあいつは！」

少年は毒づく様に吐き捨てると思い出したくも無いのに昨日の事を思い出す。否正確には頭から離れないのだ。彼が昨夜のみた光景が…

昨夜彼はいつも通り人氣の無い場所を帰路にしていた。別に人氣を避けるのに明確な理由は無い。今は人と関わりたくない、ただそれだけだった。

「今日もたいした事無い奴ばっかだったな」

ぼやく様に呟くと右拳を見るそこにあるのは血痕。ただし彼ののでは無く今日喧嘩して来た相手の物だ。

「さっさと洗って帰るか」

そして手を洗うために公園に差し掛かった時だった。

「放しなさい豚共！」

「……なんだ？」

やけに耳に通る声の罵声。そこから連続して罵声が続く、声を頼りにそこに目を向けると少女達が十人以上の男達に囲まれてながらも一人の少女が罵声を叫んでいた。

「おいおい、マジかよ」

聡明な彼にはそれだけ見ればこれがどんな状況か理解出来た。おそらくしつこくナンパ？された少女が頭に来て罵声を叫んでいるの

だろう。

少女の一人が腕を掴まれているのをみると相当強引なやつらだよ。うだ。

(助けに入るか?)

一瞬そんな自問が頭を過ぎる、だが彼は自分の思考を鼻で笑った。(出来もしないのに何を考えているのやら)

現に彼の足は一步たりとも動いていなかった。助けたいという気持ちは確かにある。だが彼は冷静に状況をかえりみてしまう。相手は明らかに自分より年上の上に十数人、助けに入った所で何が出来る? そう言う思考にとらわれ彼は何も出来ない。いや何もしない…

「我ながら吐き気がするな」

心より思考が彼を動かす。そんな風に動く自分が彼は嫌いだった。「いい加減に黙れクソアマ!」

そんな時だ、大柄な男を筆頭に数人がライセンスを取り出し発動させたのは。

「な、何考えてんだあいつらは!？」

通常時のライセンスの発動、それは今この世界において場合によっては重罪にもなりえる行為だ。そして怒りに任せた彼等の発動は明らかに犯罪行為だ。

「すぐにアークがすつとんくるぞ。それを分ってんのか？」

確かにすつとんでもアークが駆け付けるだろう。だがしかしその間少女達はライセンスを行使した男の恐怖に晒される。現に恐怖に当られ震えているのは明らかだった。

「くそ、どうする、見捨てるのか、助けられるのか、いや、そもそも勝てるかどうかも」

彼は半分錯乱していた。感情は助ける! 叫ぶだが思考は何をバカな事を…とあざ笑う。

そんな板挟みにあい彼はその場で固まった。そうしている間に男は魔法弾を繰り出そうとしていた。

「やめ…」

その光景をみて思わず声が出た。だが体は凍ったように動かない。

(クソがつ！)

彼が拳を握り締めたその時…

「やめなよ」

唐突に声が出た。改めて闇の中に目を凝らすといつの間にか、本当に誰も気付かないうちに一人の少年が大柄な男と少女達の間立っていた。

「んだテメエは！？」

「誰でも良いでしょ？それよりもうやめなよ。確かに彼女は言い過ぎだとしてもライセンスを持ち出すのはやり過ぎだよ。それに原因は君達に有るんだし」

助けに入った少年の言い分を聞いて確かにその通りだと思うと同時に、苦い顔になる紅い髪の少年。助けに入った少年はすべてを理解した上で助けに入った、彼は自分がやりたくても出来ない事を簡単にやってのけたのだ。

「うるせえ！そんなの関係あるか！邪魔するならお前から」じゃあ仕方ないね」グツハ！」

ドン！

男の声を少年が遮った次の瞬間大柄な男は体をくの字にして紅い髪の少年の後ろのフェンスに突き刺さった。

「……………は？」

思わず間の抜けた声が出たが彼にはそれ以外のリアクションは出来なかった。喧嘩慣れした彼でも人間がくの字に飛ぶ所など初めてみたのだ。

「これ以上まごつくくと地元の人達が来ちゃうから少し手荒に行くよ」そして同じく呆然とする周囲を尻目にほんの十秒足らずで男達を気絶させると、何やらメモを少女達に渡し少年は来た時と同じように唐突に消えていた。

そこまで思い出し彼は再びビルを叩く、彼は最初の言葉通りイラ

ついていた。昨日の少年が忘れられない。

自分が戸惑っている間に行動した彼が羨ましい、眩しい、尊敬の念を抱く。だが同時に妬ましく、憎く、そして何より自分が責められている様で彼の存在が自分をイラつかせる。

「クソツタレが！」

彼はもう一度ビルを叩くとその場に座り込み目をつむる。あたかも幼な子がみたくない物から目を背ける様に…。

第四話 昔馴染とあつてすぐ気付くのは意外と難しいものでは無いか？by 中世

同じ頃一人の中性敵な少年が中学の帰り道を歩いていた。茶色の髪にエメラルドの瞳、髪を肩口で揃えその整った顔は幼いながら中性的な美しさを持っていた。

「今日は姉上は姫路達と茶会じゃったな、お昼はたまにはピザでも取るかのう」

独特の口調で独り言を呟き鼻歌でも歌いそうな上機嫌で街を歩く姿は美しく、彼が学ランを着ていなければ即ナンパされているに違いない。

その代わりおねえ様方が獲物を狙う目で彼に仕掛けるタイミングを伺って居るが彼は微塵も気付く様子は無い。とそこへ：

「あ、居た居た。おい『秀吉』ー！」

そんな声が響いた。『秀吉？戦国武将？』と周りが疑問に思うなか先程の美少年『木下秀吉』が辺りを伺う。

「ん？誰か読んだかのう」

「やっぱりそうだ、こつちだよー！」

もう一度響いた声に位置を特定し目を向ける秀吉。それと同時に『ちい先を越されたか！』と同じ方向を振り向く狩人達。そこにいたのは：

「やつほー！久し振りー」

Gパンに赤いシャツを着て上に半袖の白い上着、手首に青と赤のラインのリストバンドを巻き、首には兎と二匹の蝶のストラップを使って作ったネックレスを身に着けた、心底優しい雰囲気を持った美少年、明久が手を振りながら秀吉の方向に歩を進めていた。

「……………（はっ！）」

秀吉は暫く明久に見惚れて居たが少したつと首を振って気を取り直した。

「どうしたの秀吉？ぼーっとして」

「な、なんでも無いのじゃ」

「ははは、相変わらぬ口調だね秀吉。なんだか安心するよ。って九妖のが移ったんだっけ？とにかくまた会えて嬉しいよ」

そう言っただけで右手を差し出す明久、その顔に浮かぶ笑顔は秀吉のみならず周りのおねえ様方も頬を朱に染めている。

「う、うむワシも再び会えて嬉しいぞ」

言っただけで手を握って上下に振る秀吉。暫く振ると手を離す二人。

「ところでユウちゃんは一緒じゃ無いの？」

「ユウちゃん？……姉上の事じゃろっか？」

「そっだよ。昔はそう呼んでたでしょ」

首を傾げる明久に疑問符を浮べる秀吉。どうでも良いが二人共無駄に可愛らしい。

「姉上をユウちゃんと呼ぶ昔馴染み……お主明久か！？」

「え！今気付いたの！？」

明久の雰囲気呑まれた秀吉は明久と気付かず対応していたらしい。普段の彼なら有り得ない失態だが相手が相手なので仕方ないとも言える。

「いやその。昔とは随分違っただけ……」

「そんな違っただけかな？」

言っただけで腕を広げ首を傾げる明久。それを見て改めて明久の身体を見直す秀吉。

（大人と比べても明らかに立派な体躯、風格すら見える立ち姿、そして昔以上に整った顔と溢れ出る優しさ。確かにここはワシの知る明久じゃ。じゃが身体所々には傷が有る一体今までどんな人生を歩いてきたんじゃ？）

疑問に思いながらも気を取り直し笑顔を浮べる秀吉。

彼にとって明久がどう変わろうとも明久が昔馴染の親友である事には変わりはない。そんな明久と八年ぶりの再会、嬉しく無いはずが無い。

「うむ、昔と比べ男前になったのう。見違えたぞ」

「そうかな？ありがとう。秀吉はなんだか可愛くなつたね」

「それは男のワシには褒め言葉ではないぞい！」

「えー褒め言葉だよ」

改めて再会を実感した二人は先程とはあきらかに違つやり取りに笑い合つた。

宿命の地文月で明久は親友との再会を果たした。この再会から彼は昔馴染と再び繋がつた。ここから彼等の宿命は静かに、だが確実に動き出す。

因みに明久との再会を連絡しなかつた事で秀吉の関節が増える確立に気付くのは、明久がユウちゃんと再会を果たした時だった。

第五話 友との再会で話す事と言えば離れていた間の話が定番じゃろってb y b

あれから一時間、明久と秀吉は二人で昼食をとっていた。

「本当によいのか？馳走になっても」

「気にしないで良いってば、誘ったのは僕なんだし。それに僕お金ならあるからさ」

言って朗らかに笑う明久。それを見て秀吉は柔らかく笑い返した。「ではお言葉に甘えるかの、しかしここの料理には値段が無いのは何故じゃ？」

「あ、気にしないで僕は全部把握してるからどんどん食べてよ」

因みにここは超がつく高級ホテルの最上階のレストランだ。普通は二人の様な予約無しの上子供は門前払いだが、明久はこの店の本店のVIPとして覚えられており、なんの問題も無く個室に案内された。蛇足だが秀吉は明久が空間転移で取り出した明久と同じ格好に着替えている。

「そうか？では遠慮無くご相伴に預かろうかの、店員殿、すまぬが注文を…」

因みに秀吉は知るよしも無い事だが、明久の紹介でこの店に入店した事によりVIP登録され、事ある毎に食事券等が送られて来る事になるのは完全な余談である。

「ところで主は今までどこにいたのじゃ？八年も連絡の一つも寄越さずに」

一通り食事を終えた後デザートを食べながら秀吉が口を開いた。

「うーん、どこって言うとな…帰るて来る前はアメリカにいたけど」

「アメリカ！？」

「その前は中国、ロシア、ドイツ、オーストラリア他にも色々かなあ、ハワイにも行った事あるよ」

指折り数えながら国の名前（一部地方だが）をあげて行く明久に

秀吉は驚愕に目を向く。

「お主この八年一体何をしていたんじゃ!？」

「何って、犯罪組織を潰したり、小さい国同士の戦争を終結に導いたり、難民救助もやったし。あ、一時期はチームで世界を回って新しい組織造りを手伝ったりしてたよ」

「主は本当に何をしておったのじゃ!？」

なんでも無いようにとんでもない答えを返す明久に思わず叫ぶ秀吉。当然と言えば当然だ。

たとえ世界の理が変わろうと子供は勉強やスポーツ、魔法や技を学ぶ。それが世界の常識、だが彼はそれから外れており、あたかもそれが常識であるかのように語る。八年ぶりに会った親友がそんな生活をしていれば叫ぶなと言う方が無理な話だ。

「秀吉。ここはお店なんだからあまり騒がない方が良いとおもっけど」

「す、すまぬあまりの事に気が動転してしまつての。だが今の主に常識を言われるのは納得いかんのう」

「?なんで?」

「……はあもう良い」

明久の心底の疑問に溜め息を吐く秀吉。暫く無言でデザートを食べながら秀吉は再び口を開いた。

「八年ぶりに帰ってきたんじゃ、暫くこちらにいられんじやろ?」

「うん、とりあえず二月は日本にいるつもり。次は確かイギリスだったかな?」

「二月、長いのか短いのか。というか何故その様な過酷な生活なのじゃ?」

「過酷かどうかは分からないけど、僕今アークにいるんだ」

「ほう、アークに…そう言えば明久は昔から魔技の才はずば抜けていたのう、まさかその若さでエリートコースにいると思わなかつたが」

アークは一流企業以上に世界に対する影響力を持つ世界中から多

くの入隊者が集う警察機構だが、誰でも入れると言うわけでは無い。厳しい能力のレベルの測定、血反吐を吐く程の訓練に耐え抜く精神力、専門的な知識。そして何より実働隊として戦い勝つための強さがあるのだ。そのためアークに在籍しているイコールエリートという認識が一般的だ。

「エリートかどうかは判らないけど幸い僕には力が有るから。それ出来る事をしてるだけだよ」

「明久らしいのう」

明久は昔から自分より他の誰かを優先し助ける所があった。子供ながらにそれを凄いと思っていた秀吉は、年月が経つても変らぬ強さを持った明久を眩しそうに見詰めていると個室の前に誰かが来たのを感じ取った。

「あ、来たみたいだ」

「誰かと待ち合わせでもしておったのか？」

「うん、こつちに来て別行動を取ってた僕の彼女達。ここで待ち合わせしてたんだ」

「そうか明久の彼女達か、それならワシも挨拶を……………彼女？
しかも達…じゃと…？」

あつげらかんと言う明久の爆弾発言に停止した秀吉を尻目に個室の扉は開かれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8458y/>

バカと新世界と召喚獣

2011年12月16日02時51分発行